スタジアムについて考えるシンポジウム　議事録

日時：平成２３年１０月7日（金）１８：３０～２０：３０
会場：北九州市立男女共同参画センター・ムーブ　ホール
内容：１８：３０～１８：３５　**市長挨拶**
　　１８：３５～１９：２０　**第一部　基調講演「夢があるから強くなる」**
　　財団法人日本サッカー協会名誉会長　川淵　三郎氏
　　１９：２０～１９：３０　（休憩）
　　１９：３０～２０：３０　**第二部　パネルディスカッション**
　　＜コーディネーター＞
　　一般財団法人日本経済研究所専務理事　傍士　銑太氏
　　＜コメンテーター＞
　　川淵　三郎氏
　　＜パネリスト＞
　　日本経済新聞社編集委員　武智　幸徳氏
　　ジェフユナイテッド株式会社広報課長　高橋　薫氏
　　北九州市立大学都市政策研究所准教授　南　博氏

１　市長挨拶

みなさま、こんばんは。

今日は川淵名誉会長をはじめ、有識者の皆様、そしてご来場の皆様に一堂に会していただきまして、非常に有意義なシンポジウムが開かれます。皆様方のご来場、心から感謝申し上げます。

ここのスローガンにも書いてありますように、市民の皆様に夢と感動を与える、そして豊かで活力ある北九州市の将来のために、新スタジアムの構想の提案をいたしました。そこではサッカーやラグビーなどのハイレベルの試合をみるということに加えまして、時にはコンサートなど、多くの市民の方々に、そこで楽しんでいただけるようなスタジアムを想定しています。

北九州市は間もなく、市制５０周年を迎えるわけでありますが、残念ながらプロスポーツチームを持っていなかったのであります。しかしニューウェーブ、ギラヴァンツが、皆様の応援により、プロスポーツチームが初めて誕生いたしました。

先日もＦＣ岐阜との試合をみに行きました。行ったときは１対０で負けていたのですが、あのように素晴らしい試合（３－２で勝利）で、市民に大いに感動を与えていただきました。

さて、この公共事業ということにつきましては、色んな様々な意見があります。過去の北九州市の公共事業を振り返りまして、色んな意見があることは皆様ご案内のとおりであります。その中で、この新スタジアムについて、皆様の温かいコンセンサス、同意というものをいかにしてゆるぎないものにしていくかということが課題だと思っております。

本日、ご講演をいただきます川淵名誉会長は、Ｊリーグ初代のチェアマンでありますが、Ｊリーグ百年構想を提唱されました。つまり、スポーツでこの国が豊かになることを目指して活躍をされておられます。地域に根ざしたスポーツクラブで、そして市民スポーツ文化の振興を図りたいという川淵さんの思い、私も、そして皆様方も一緒に深く共鳴をされているものと思います。

今日はそういった意味で、新スタジアムの将来を考える有意義な会合であると思います。どうか、このシンポジウムの成功によりまして、一生懸命頑張り、大変な成果を挙げている本市初のプロスポーツチーム、ギラヴァンツに対する温かい支援の輪がもっともっと大きく広がっていくことを心から期待をするものであります。

本当に本日は皆様お忙しい中、ご来場賜りまして誠にありがとうございました。

２　第一部　基調講演「夢があるから強くなる」

【川淵キャプテンのお話のポイント】

■　スタジアムのはしり（第一期）は、三ツ沢スタジアムで、その後、アジア大会や東京オリンピックを経て、小石川サッカー場や大宮サッカー場などが徐々に整備されてきた。初期のサッカー場は、土盛りのグラウンドだったり、排水が悪いなど大変だった。

■　１９９３年にＪリーグがスタートしてから、１５，０００～２０，０００人収容で、芝生の綺麗なサッカー専用のスタジアムが日本にでき始めた。

　その時代の象徴がカシマで、当時人口４５，０００人のまちに、まちの活性化のためにサッカー専用の球技場をつくろうと当時の茨城県知事が英断し、まち中が盛り上がったのは有名な話である。

　市民調査では、多くの市民が、「まちの知名度が上がった」「市民同士で共通の話題ができた」と回答した。僕が一番嬉しかったのは「サッカーの話題で親子の会話が増えた」との答えだった。

■　スポーツの持つ意味は、例えば美術館や博物館、図書館などと同様で、人が生きていく上において、必要な勇気や感動や悲しみさえも含めて得られるというお金に換算できないものがある。

■　今は、食事やトイレなど来場者にとって、本当に居心地の良い、地域の特徴を活かした、そこに行きたい、そこで皆と一緒に時間を過ごしたいというスタジアムをどう造っていくかということを考える段階にきた。

■　スタジアムは、１５，０００人の収容で造ると、なぜか１３，０００人位しか入らない。北九州市は、２０，０００人の入場を考え、２５，０００人位の収容で、北九州市の誇りとなるような、市民の誇りとなるようなスタジアムを造って欲しい。

■　北九州市が生まれて、再来年でもう５０年と聞いて驚いた。実は「北九州」のこと、日本ではあまり知られていない。このギラヴァンツ北九州こそが、この日本にその名前を広めてくれる最大のソースだと思う。

　日本だけではなくて、アジア、ヨーロッパ、世界にも広げることが出来るサッカーというものを通じて、そして皆さんの支援によって、素晴らしいスタジアムとチームができますよう心から願っている。

３　第二部　パネルディスカッション

【傍士氏】

皆さんこんばんは。

私も川淵さんのお話は何回も聞いていますが、皆さんは本当に幸せです。実は先程された話は、今日初めてされた「サッカー場」の話です。私自身もなるほどと思う話がありました。

２０１０年に晴れて北九州市が「Ｊリーグのあるまち」になりましたが、これは、ただ単にサッカーやスポーツをさす出来事ではなくて、北九州の町を愛する人たちに「ホーム」が生まれたと、「ホームチーム」が生まれたことです。

私は東京にいますが、その喜びは地元のことだけではないのです。ふるさとを離れて首都圏で働く北九州出身やゆかりの人たちが首都圏での試合にたくさん応援に行かれて、そこで旧交を深めている、そういうことが毎試合行なわれているわけです。その人たちの思いもこめて、今夜は新しいスタジアムのあり方について楽しく夢を語って行きたいと思います。

進め方については、まずパネラーの皆さんにスタジアムの思いをそれぞれの立場から語っていただき、そのあと今の世界のスタジアムがどうなっているのか、ヨーロッパのスタジアムがどうなっているのか、１０分強の映像をご覧頂きたいと思います。その資料として、お手元の冊子「スタジアムの未来」も参考にしてください。そして、いよいよ北九州市のスタジアムの話をしていきたいと考えています。

それでは紳士のまち北九州ということで、レディファーストで高橋さんから。高橋さんは女子中、女子高、女子大にいきなり女子サッカー部をつくってしまったというサッカー大好き人間ですけれども、まず印象に残る好きなスタジアムはどこですか。

【高橋氏】

小さいですけど、イングランドのフルハムのホームスタジアム。名前は忘れてしまいましたが。まちの中にスタジアムが溶け込んでいるというか、まちの雰囲気と同じつくりでつくられているということで。フクダ電子アリーナがいわゆるコンクリートの打ちっぱなしで、これがもっと温かい雰囲気で出来ればよかったと日々思っていたということもあるので、そんな色のあるスタジアムはいいなあと思いました。

【傍士氏】

この後のＤＶＤにはフルハムのスタジアムは出ませんので、みなさんお帰りになってホームページでチェックしてみてください。高橋さん、ギラヴァンツ北九州のホームができて、ホームスタジアムの意味は、チームにとっても当然ですが、観客の目にとってどういう条件を満たすものであれば良いか、フクアリ（フクダ電子アリーナ）が出来てからどのようにお考えでしょうか。

【高橋氏】

つくるときから思っていたのは、スタジアムを「劇場」にしたいということ。例えば歌

舞伎などの舞台を見に行くと周りの景色が見えなくて、舞台しか見えないようなつくりになっていると感じていて、前のスタジアムがそうではなかったので、フクダ電子アリーナでは、お客さまがピッチを意識しなくてもピッチにしか目が行かなくて、そういうスタジアムにすることが、サッカーに集中して試合を観れるようなつくりのスタジアムを望んでいましたし、スタジアムは本来そうあるべきじゃないかなと思っていた。

【傍士氏】
　では当然、陸上トラックはいらないですね。

【高橋氏】
　陸上トラックはいりません。

【傍士氏】
　次に南先生。先生は、Ｊリーグの観戦者意識調査にご協力をいただいており、ギラヴァンツ北九州の調査もされています。実際にスタジアムの調査をされて、スタジアムが生み出す効果について先日の鳥栖の国際試合の調査も含めて話をいただけますか。

【南氏】
　スタジアムの話から、一旦話を広げてスタジアム外の話になるかと思うのですが、まずギラヴァンツ北九州が地域に多様な効果があるという点について、先ほどの基調講演で川淵名誉会長からお話をいただけました。本学でスタジアム観戦者調査、あるいは一般市民を対象にした市民意識調査というのも実施しておりまして、その中でギラヴァンツ北九州が北九州市に与える影響を調べています。その中で、ギラヴァンツ北九州が地域の新しいシンボルになるとか、北九州の知名度・イメージの向上につながるとか、まさに川淵名誉会長がご指摘いただいたようなことを、サポーター以外の一般市民も７割ぐらいの方が期待していいただいています。ギラヴァンツの素晴らしさを分かっておられるスタジアム観戦者では、もっとその比率が高いということになっています。それに加えて、一番は子どもたちに夢を与えるというのが非常に大きなポイントを占めていて、一般の方も９割ぐらいの方がその点に効果があると感じておられるわけです。
　先日、鳥栖のベストアメニティスタジアムの方で、Ｕ－２３のオリンピック予選の日本代表とマレーシア代表の試合がありました。そのときも鳥栖の素晴らしい会場が、この中にも現地を見られた方がたくさんいらっしゃるとは思いますが、非常に素晴らしい雰囲気で盛り上がって、その試合前後にスタジアム周辺の屋台村などでのいろんな経済活動や、鳥栖市内の商店における試合チケットによる割引サービスなども展開されていて、非常にまちなかへの波及効果を誘導するような取組が事例からも多く見られました。そういった意味でも仮に新しいスタジアムが小倉駅北口に出来れば、まちなかへの効果も期待できるというようなことも考えられます。

【傍士氏】

高橋さん、「街なか」といえば、フクアリも蘇我駅から１０分くらいですけど、どういった効果があると思いますか。

【高橋氏】

スタジアムを作るときに、駅からちょっと距離が欲しいなと思ったのは、試合に来たお客さまが勝ってうれしい、負けて悔しいということで、ちょっと飲んで帰ろう、となるようにしたかった。そう言う人を受け入れる空間が必要だし、それが次のコミュニティを生んでいく、サッカーを見るだけじゃなくて、その後、仲間と飲んで嬉しいという、ずっと付随していくような楽しみを生むためには、例えば居酒屋がたくさんあるとか、そういうことが必要だと思うし、そういう空気がつくれることがいいなあと思います。あと街の雰囲気。蘇我駅から８分くらいかかるが、街路灯にバナーがぶら下がるとか、マンホールがジェフのデザインになるとかだったり、駅を降りてから、スタジアムへ向かうまでに高揚感が高まる仕組み、なんとなくわくわくする雰囲気をつくることが大事だと思います。駅に降りた瞬間に、ああスタジアムに来たなという雰囲気をつくる、そんなまちづくりがいいと思います。

【傍士氏】

先ほどの鳥栖も、フクアリもサッカー場ですが、実際サッカー場をつくる際には不思議といろいろな意見が出てくる。本来、日本のスポーツ施設のレベル、文化としてのレベルが問われる事柄だと思います。先ほどの川淵キャプテンの言葉、スポーツは、アート、芸術同様に人間として必要なものです。

そういう中で武智さんが世界のスタジアムを見て、日本のスタジアムのレベルや抱えている問題をお分かりですので、その辺をザクッと斬っていただき、現実に引き戻していただければと思います。

【武智氏】

日本のスタジアムのレベルですよね。非常に分かりやすい例えで言うと、なんとなく日本のスタジアムを見ると団地を想像します。皆さんの中で、団地にお住まいの方は不快に思うかもしれないですけど、なぜ団地を想像するかというと、団地が出来たときは当時としてはよいものだった思います。木造の安いアパートと比べれば、鉄筋でできたものは当時の庶民の憧れだったと思いますが、一つ雛形が出来れば、それが日本中、全国に同じような団地が出来上がっていって、どこへ行っても同じもの、同じようなつくり、絶対ここに玄関があって、居間はここであれば奥に和室があるんだろうなとか、非常に画一的な同じようなものがどんどん出来上がっていった。日本のスタジアムにもそれと同じようなことが言えるんじゃないかと思います。先ほどの国体のスタジアムもまさにそれで、前例踏襲というかどこも同じ、胸をときめかせるものが全くないようなものがどんどんできあがっていくような感じです。

それに比べると団地ということで対比すると、ヨーロッパのスタジアムはどちらかというと民間が作っているマンションのような感じがします。それも顧客のニーズ、買い手の

ハートを掴むためのどんなアメニティが必要なのか、どんな設備が必要なのか、あるいは部屋の中はどういうふうにつくればお客さんが買ってくれるのかということを真剣に考えているマンション。ヨーロッパでもお客さんがたくさん入るリーグのスタジアムはそういうものがどんどん増えている。ユベントスが今季から初めて自前のスタジアムを持った例もそうですが、自分たちのつくりたいもの、こういうお客さんを呼びたいというもの、こういうふうにお客を喜ばせたいという切り口から入っていって造っているから、やはりそれは団地とは全然違うだろうと思うんですよね。

【傍士氏】
具体的には団地と呼べるようなスタジアムはどういうものでしょうか？

【武智氏】
それを言わせるんですか？

【傍士氏】
お願いします。

【武智氏】
やっぱり一番陳腐化している代表的な例は国立競技場ですかね。もう５０年たってるし、とにかく使い勝手が悪いし、部屋なんかも利用者にすこぶる評判が悪いし、だから建替えの話も出てくるわけですけど。２００２年にワールドカップを開催して、素晴らしい施設がたくさん出来たかのように見えたんですけども、４年後のドイツに行ってスタジアムを見たら仰天しちゃったわけですよ私なんか。たった４年しか違わないのに、ドイツのスタジアムの素晴らしさはなんなんだ、これはと驚きました。

【傍士氏】
みなさんも女子ワールドカップで、なでしこの試合に釘付けだったと思いますが、あの試合会場、ほとんどが２部リーグのスタジアムなんです。ほとんどが、２．５～３万人収容です。川淵さん、今の団地という表現について、何かコメントはありますか。

【川淵氏】
僕も昔団地に住んでましたから。話は変わるんだけど、先ほど失礼なこと申し上げたかもしれないけど、北九州市誕生５０周年を迎えるんですが、ここへくるときに小倉城の素晴らしい雰囲気、それから緑の公園がいっぱいある。こういうのはきわめて珍しくて、Ｊリーグの試合に来た人は、こういうところをみたら、北九州市を気に入るだろうなと思いましたね。だから、そういういいまちづくりをしているということを多くの日本人が知らないと思うから、Ｊリーグの試合をいい機会に、多くの人が見ると思いますから、そういったものが口コミで伝えられていくことに、僕は価値があると思いますね。
先ほど話ができなかったんですけど、モナコなんかは土地が狭いからスーパーの上にサ

ッカー場があるんですよ。３年、４年ほど前に、京都の副市長が、この人は京都経済同友会の代表幹事で、ひょんなことから知り合って、小学校の校庭の緑化について、ヨーロッパの芝生を見て、すばらしさを知って、帰ってから京都の小学校１０校くらい芝生化したんですよ。それでそういう活躍を認められて、周りにも懇願されて今の副市長になったみたいです。その人から電話があって京都のキリンビールの工場が閉鎖されて、そこにスーパーが出来る、その屋上にパープルサンガのスタジアムが出来ないかということをいわれたんですよね。僕はこれはぜひ協力しなきゃということで、キリンビールの持ち株会社の社長にお会いしましたよ。何とかして欲しいって言ったら、もう設計が全部出来ていて出来ない、ということで残念だったんですけど。日本でもそう言うことが出来るんなら、複合施設ができないか、だから、北九州市のスタジアムの候補地も色んな使いかたが出来るなと、色んなシナジー効果が生まれるだろうなって、海が横にあって、多くのいろんな人の賛同を集めて、一日でも早く、僕が生きているうちにつくって欲しいなと心から思ってます。

【傍士氏】

市役所の前は、勝山公園っていうんですか？普通だったら芝生広場にはしないなと思いました。それから、小倉駅の北側で最近芝生になった公園、ああいう利用の仕方は日本ではなかなかできることではないですね。

【川淵氏】

そういう意図を持った人がいるっていうことが素晴らしいんですよ。

【傍士氏】

武智さんが言われたように、団地が悪いというよりも、むしろ日本人が雛形に習うという民族であれば、良い雛形をつくってさえいれば、それに習う。ギラヴァンツ北九州がその雛形になれば、おそらく日本中にそういうものが出来るのではないかと思います。川淵さんの言われたモナコのスタジアムは、複合施設になっているということでしたが、Ｊリーグが誕生した２０年前、ヨーロッパではサッカースタジアム、アメリカでは大リーグの野球場がどんどん街なかに回帰して、まちづくりの一部として進化を続けているという流れが世界ではあります。その中で、ヨーロッパのサッカー場について、今からＤＶＤで１０分強ご紹介します。こういうものを雛形として、ぜひとも北九州で考えて欲しいと思いお見せします。

《ＤＶＤ「スタジアムは我がまちの誇り」放映》

【傍士氏】

映像をみると、今日のために作ったように思われる方がいらっしゃるかと思いますが、たまたま同じ黄色だったんです。映像に出てきたスタジアムのホームタウンの人口は、北九州市よりもすべて少ないのです。工費、土地代を除いてすべて１００億円以下です。マ

グデブルクは４０億円、そんな感じです。だから、お金がたくさんかかるんだろう、人口が多いんだろう、ということでは決してないことはお分かりかと思います。
　パネラーの皆さんに、どこが印象に残ったかというのをお聞きしたのですが、南先生？

【南氏】
　私はスタッドドスイスが一番印象に残りました。環境への配慮が面白い、素晴らしいと思いました。

【傍士氏】
　ありがとうございます。では武智さんは？

【武智氏】
　いっぺんにたくさん流してどこがどうというのが分からなかったんですけど、厨房のあるレストラン、どこも共通しているんでしょうけどね、今のヨーロッパのスタジアムでは。日本では東日本大震災の後、コンロも何もない体育館みたいなところに被災者の人が押し込められて、温かいものをなかなか食べられないみたいな、ああいう絵を見ていると、こういうスタジアムが出来れば防災拠点にも簡単になりますよね。そういうものが素晴らしいですよね。

【傍士氏】
　高橋さんは？

【高橋氏】
　地下にショッピングセンターがたくさんあったスタジアム・・・

【傍士氏】
　バーゼルですね。あそこは人口１７万人です。

【高橋氏】
　行政の方々にぜひお願いしたいと思うのですが、フクアリをつくるときに、試合の日だけしか人が来ないのであれば、地域のシンボルにならないのではないかという話を随分して、スタジアムにも試合のない日も人が集まってもらえるようなものをたくさんつくれないかということを、いろいろ検討したんですけど、お金の問題もあったんですけど、公園法の問題もあって、川淵さんが瑞穂の話、建蔽率の話をされてましたけど、建蔽率とか公園法とか、日本はたくさんの法律で結構がんじがらめになってて、運動施設なのか、商業施設なのかと、公園の中につくるのか、一般の土地の中につくるのかで全然出来るものが変わってしまうことが、悪い意味で大きな足かせになっている。そういうのを全部取っ払ってもらったスタジアムを北九州市には造っていただきたいなと思います。

【傍士氏】
川淵さんは？

【川淵氏】
印象深かったですね。こういうものが北九州市に出来たらいいなと思う。要は規制緩和の中でどうやってこのようのスタジアムを造っていくかなんですよ。はじめのころは三ツ沢なんかで、火を使ってはいけないと、あったかいものをぜんぜん食べさせてあげられなかったんですよ。つまらない規制が結構多いです。
北九州市の候補地をみるとＤＶＤで見たようなことがいっぱい可能だなぁと、そういう期待を抱かせる映像でしたね。

【傍士氏】
それでは最後に、北九州市のスタジアムについて具体的に考えていきます。今日、なぜ高橋さんに来ていただいたかというと、今は観客が３０００人しか入らないのに、新しく造っても来るわけがないだろうと思う人も少なくないと思います。かつて、ジェフ市原の時代のスタジアム、本城と同じような状況で、新しいスタジアムを造って、果たして何がどう変わったのか？これが北九州への大きな示唆になると思います。その辺りを高橋さんに話していただけますか？

【高橋氏】
市原臨海のときは平均入場者数が５～６，０００人くらいだった。７，０００人だったら今日入ったねぇ、みたいな状態でした。

【傍士氏】
それはＪ１で？

【高橋氏】
Ｊ１ですね。しかも２００５年はナビスコの優勝を争っていたにもかかわらず、そのくらいの人数で、当時の監督のオシムさんは、「地元のひとたちはいつになったら、どうなったら見に来るんだ」という話をされていました。そのころにフクダ電子アリーナの建設が進んでいて、行政の方々には「高橋さん、本当に１８，５００人って来るの？本当に入るの？」と言われてました。「いや、入れます」と言ったんですけれども、正直、自信はなかった。でもいいハコをつくれば人は入る。少なくとも１万人程度だということにはならないと思ってました。そしたら２００５年完成して、２００５年は５試合くらいしかなかったが、２００６年、２００７年は、２００８年と平均入場者数が約１４０００人ということで、当時、市原だけの試合を考えると３倍近いお客さまに集まっていただいたのは非常に大きなことでした。
要因としてはハコの問題、ピッチまでの距離が近いとか、交通のアクセスの問題で主要駅から歩いて８分とか、前の施設は歩いて３０分くらいのところ、だからバスに乗って、

という感じだったのですが。そういうところだったので、アクセスの問題、市原のときはゴール裏に屋根がない。バックスタンドもほとんど屋根がないという状況でした。新しいスタジアムは全部屋根がついていて、コンコースも広くて、温かい食べ物が出せるという、その場で煮たり焼いたりしたものバーベキュー屋さんみたいなものが出せるようになったこと、そういういろんな要素が入って、お客さまが増えたと。結果、ジェフというチームは当時、Ｊ１の中でもお荷物と呼ばれていたチーム、成績は悪い、お客さまは入らない、アウェイに行ってもぜんぜん貢献しない。どちらかというと、川淵さんのお話にあったように、レッズとかアントラーズとかがぜひ来てくれ、というような状態だったんだけど、スタジアムができてお客さまがたくさん入るようになって、まず広告収入がものすごく増えるようになったし、アウェイに行って喜ばれるようになったと。結局お客さまが増えて、アウェイに行くと、いつの間にか、お客さまが入らないチームからジェフが来るときはお客さまが入ると言われるチームになったと。

それと、Ｊ２に落ちたときに、Ｊ１の他クラブのサポーターから「フクアリ、いいスタジアムだから行きたいだよね。だからＪ２に落ちてもらったら困るんだよね」と言われるようになり、逆にＪ２のサポーターからはフクアリ行きたいからＪ１に上がらないで欲しいんだよね。」という意見を言われるようになりました。

要は逆を言うと、アウェイからたくさん人が来てくれるということだと思うんですよね。それは、まちの活性化とか、千葉のいわゆるツーリズムなど、間接的にでも貢献しているんだろうなあと。そういうところが、いいスタジアムができて、人口も市原市は３０万人弱に対して、千葉市は９６万人いますから、人口も多くなったのもあると思います。色んな要素はありますが、いいスタジアムができたというのが一番大きかったのではないかと思う。それをきっかけにいろんな面に貢献していったのだと思います。

【傍士氏】

南先生、北九州市の基本方針には、大きく分けると３つあり、①球技専用であり、スポーツ文化をつくるんだということ、②環境モデル都市としてふさわしいこと。それと街なかにある理由として、③まちづくりという観点にこの施設を活用するんだということですが、具体的には北九州市の場合、中心市街地活性化や観光にどんな効果が期待できると思いますか。

【南氏】

Ｊリーグチームの存在意義は、１番はいわゆるお金では換算できないようなものが一番だとは思うのです。一方で今ご指摘の経済効果、これもかなり期待できると思います。今、高橋さんからもお話がありましたように、経済効果というものを考えるときは、外部の方がいかにこの北九州市に来ていただいて、サッカー観戦の場合、サッカー観戦以外の部分でお金を使っていただくか、なおかつお金を使っていただくだけじゃなく、そこで楽しんでいただけるかが非常に大きいポイントになってくると思います。

今年、Ｊリーグの観戦者調査というのを９月１７日のコンサドーレ札幌戦で実施させていただきました。昨年はアウェイのお客様の動向は分析しなかったのですが、今年はそこ

の部分に力を入れて整理をしてます。経済効果という点に着目するとアウェイのお客様の行動が大変重要だろうということでやっているんですが、これによると本城の施設だとか設備とかの満足度を尋ねると、ギラヴァンツの応援者の方は、本城の施設・設備について、３分の１くらいの人が、まあいいんじゃないかということを思われているんですけど、対戦相手のクラブの応援者等の回答では、本城に対してもっとシビアに見ておられます。交通アクセスよりも施設・設備だとかに非常に問題点を感じておられるということで、やはり他のクラブの方が来たくなるようなスタジアムになるということが、先ほどの高橋さんのお話にありましたけども、そういったスタジアムになるということが、より経済効果を発揮させるポイントなんだろうと思います。なおかつ、それがまちなかにできるとなりますと、サッカー観戦前後に、色々と観光なり経済活動なりをしていただけるということが非常に大きいと思います。

【傍士氏】

ありがとうございました。武智さんにお伺いしたいのですが、北九州市の大事な点として、国際試合にも使われるスタジアムにしたい、と考えると、どういうものが重要になってきますか、収容能力はもちろんですが。

【武智氏】

男子のフル代表戦なんかをやろうとすれば、４万は入らなければならないし、それ以下のカテゴリーの大会でも２万人以上の規模を造っておかなければ、なかなか誘致はできないのではないかと思います。

私、今日ここに来て、予定地を見てみたんですけど、港、海に近いスタジアムということで、私がぱっと思いついたのが、ケープタウンのワールドカップのスタジアムなんですけども、あそこは南アフリカ、本当に辛い旅でみんなに危ない危ないといわれて、行ってみたら何かと怖くて仕方がなかったのですが、唯一南アフリカで気になってしょうがなかったのが、ケープタウンなんですね。スタジアムがすばらしいというか、とにかく立地。港がすぐそばでボードウォークがあって、すごいショッピングセンターがたくさんあって、ご飯がいつ行ってもおいしいものが食べられるし、もう最高の場所でした。今日、北九州市に来て、ここもそうなってくれたら来甲斐があるなと思ったんですけどね。

【傍士氏】

ケープタウンは行くのはお勧めしませんが、ホームページなどでしっかりチェックをしてください。

それでは会場の方からも、お話を聞きたいという方がいらっしゃるでしょうか？

【参加者Ａ】

高橋さんに聞きたいのですが、スタジアムについて集客が重要だと思ってます。福岡と千葉と共通だと思うのですが、野球チームがあってＪチームがあってとというところです

が、福岡はアビスパとギラヴァンツで、Ｊも２チームあるけど、ホークスの報道に偏重しているというのがあって、そのなかでサッカーの報道が少ないというのが集客面で影響が出ているのではないかと思う。そんな中で千葉でもロッテマリーンズとかある中で、どのように集客の維持に対しての工夫をしていったのですか。お聞かせください。

【高橋氏】

たぶんちょっと状況が違うと思うのは、ロッテのお客さまはわりと東京方面からが多くて、ホークスは地元が多いと思うのだけど、そこがちょっと違うと思います。
こういう言い方は失礼かもしれませんが、野球というのは高いところにいると思います。選手とファンの距離があるとか、クラブと地域の距離があるというか、ちょっと感じているので、私たちは徹底して地元作戦みたいな形です。地域のイベント年間６０日くらい出て行くんですけど、ほとんど無償のような状態で、人件費くらいお願いしますというような形で出て行くんですけど。ロッテさんは来てくださいというとウン万かかるのに、ジェフさんは（たった）これだけできてくれるのですかという話が結構あっていたりするみたいです。とにかく私たちの場合は、野球と違ってとにかく知ってもらうというのがすごく重要だったんで、とにかく地域を歩こうまわろうと、徹底して地元を歩いて、地元の幼稚園に声をかけられたら幼稚園に行き、小学校に声をかけられたら小学校に行き、町内会、盆踊りでもジェフのダンスを披露し、そういった形で、やっぱり地域に浸透させていくということをどれだけできるかというところだと思うし、今もそう思ってます。

ただ、野球にはかなわないところはありますし、一緒にコラボしようというところはあるし、お互いのチケットを持ってきたら、互いのチケットを安く購入できるなどをやってます。ジェフのファンがＪの試合のない日にロッテを見に行ったり、ロッテのファンが１０月以降のシーズンオフの時にジェフに来てくれたりとか結構あるみたいです。けれども全てを一緒にやっていくのはすごく難しいのかなあと。お互いのコラボチケットをやったからといって爆発的に売れるというとそうでもないし、独自の路線を、野球とは違う、Ｊリーグのよさ、いわゆるホームタウン密着という、どれだけ地域の方に理解していただくか、野球と違うサッカーの考え方が違うということを、サッカーの良いところを知ってもらう活動を一生懸命したという感じです。それが正しかったかどうかは分かりませんが、それで少し結果が出たのかなと思ってます。

【傍士氏】

地方都市の地域の意識が高いところは、うちはサッカーではなくて野球だという話になるみたいです。でも、プロ野球の楽天のマウンドにベガルタ仙台のシートを置き、ベガルタのセンターサークルに楽天のシートを置き、エールの交換をするという、共に仙台を応援するという気持ちは一緒なんだという意識が重要だと思います。

ではもう一人、どなたかいらっしゃいますか？

【参加者Ｂ】

川淵キャプテンにお聞きしたのですけど、このスタジアムのイメージを見たときに、飛

行場とフェリーと豪華客船が停まって入れるようなアイデアはどうでしょうか

【川淵氏】

今日現地を見て、フェリーなんかがありましたよ。ここからフェリーに乗れるなとか、ここからどこかへいけるなとか一番最初に思いましたね。それはグッドアイデアです。
そういうスタジアムになったら、それはそれで人気になって、ぜひいってみたいというファンが増えるわけですから、それではもう２万人くらいじゃ足りないですね。３万人くらいのをつくらないと。それはすごくいいアイデアです。

【傍士氏】

小倉駅から門司港駅まで、行きはＪＲで、帰りは門司港から水上バスでスタジアムの前の桟橋まで使えます、みたいなものがと面白いと思います。

パネラーの皆さんに、最後にこれだけは北九州市のスタジアムに盛り込んで欲しいものをお願いします。まず南さんから。

【南氏】

語弊を恐れずに言うと、素晴らしい球技専用のスタジアムを造るというのが目的の事業であってはならないと思います。このスタジアムを核として、地域社会だとか地域経済がいかに元気になるか、地域の将来に対していかに夢が持てるようになるか、そこが非常に大きなポイントであると思います。その部分をしっかりはずさないことを目的とした検討が大事だと思っております。そのためには行政だけではなく、市民、企業、各種団体、その他の多くの皆さんが協力し合って取り組んでいくことが重要だと思っています。これはハードだけじゃなくてソフトの話も重要だと思うので、そういったスタジアムになればいいなと思います。

【傍士氏】

ありがとうございます。では武智さん。

【武智氏】

私がいつも思っているのは野球だ、サッカーだという前に、スポーツというもののライバルが非常に多くて、スポーツ以外のことに時間を使うというのが非常にたくさんあるわけです。そういう人たちにどうにか、なんとかスタジアムに足を運んでもらうことを考えるときに、例えばこの会場のホールを見ても立派な器だなと私は思うわけなんです。リバーウォークなんかにも、すごく立派なホールがあって、快適な空間で、聴く音楽やお芝居にしても、あるいは映画館だって昔と比べて快適に見られますよ。そういうものと比べたときに日本のスタジアムでは、こういうところで見られる感激の大きさ、環境の快適さに比べたら、ほとんど拷問に近いようなこともあるわけですよ。そういうところにお客さんに来てもらって、お金を払って観ろよというのは、もう通用しないんじゃないかと思います。それはサッカーどうこうじゃなくて、スポーツ界全体で考えていかないと本当にまず

いよと。現に野球だって、巨人だって段々お客さんが減っているという現実があるわけですよね。だから、スポーツ界全体で真剣に考えないといけないところに来たんじゃないかなと。だからその出発点みたいなものが、これどうだ！みたいなものが北九州市に生まれたら素晴らしいと思う。

【傍士氏】

フクアリがいいという評判ですが、高橋さんに言わせると、この程度では満足できない。私に北九州のスタジアムを造らせてほしいとさっきも話されていたので、ではどう造りたいですか？

【高橋氏】

いつも言うのですけど、フクアリは妥協の産物だといつも言っています。しょうがない、ここで、というもので出来たスタジアムです。一番後悔しているのは、２５，０００人要求していたらよかったなんと。２０，０００人としてことが最大の後悔、２５，０００人が出来ていたら２万人の入場者数が入っていたと思います。だから２万５千人の入るスタジアムができて欲しいと思いますし、フクアリをつくるときもやったのですけど、他のスタジアムのいいところとか、悪いところとか、スポーツ施設に限らず、他の施設、例えば芸術施設とかでもいいから、いいところをどんどん取り込んで、時代はどんどん進んでいて、フクアリももう古いものになりつつあるんですけど、新しいものを取り込んで、悪いところは反省して、大きいものではなくて、質の良いものをつくって欲しいなと思います。

それと、ハコを造るのではないことです。この客席は、お客さまにとって見やすい、座りやすいイスなのか、この動線は障害者の方にとって苦痛じゃないかとか、ハコではなくてソフト、使う人たちのことを、選手もそうですし、お客さま、売店、係員・ボランティアさんも使う人たちのことを考えたスタジアムになって欲しいなと思います。

武智さんのお話を聞いていて、このまちを歩いて、人間が豊かになりそうなまちですねという話しをしました。建物のつくりとか、色合いとかを見てそう感じて、このまちに合った人間が豊かになるような、そんな感覚をもたらすスタジアムができると本当にいいなと思いました。

【傍士氏】

ありがとうございます。それでは川淵キャプテン、最後に北九州市のスタジアムが世界一のスタジアムになるように、もう一回大きな夢を注入してください。

【川淵氏】

逆にすごく現実的な話になるけど、１万人ちょっとしか入らないよね、今の本城陸上競技場は。でも１５，０００人入らないとＪ１には入れてもらえないです、３位以上になっても。ということはいずれ５０００人増やさないといけない。今のスタジアムに５０００人継ぎ足すのは、無駄な経費をかけるということに繋がる。しかも、あまりにもお金をかけただけで、大したスタジアムじゃないということになるのは勿体無いので、出来るだけ

早くそういう方向性を出していただいて、専用スタジアムを造って欲しいなと思います。

Ｊリーグが出来る前に、アメリカンフットボールのスーパーボールを見に行ったんですよ、１９９２年くらいに。ローズボールの１０万人入るスタジアムのイスがですね、棒みたいな長椅子で２本アルミの棒が流れていて、ほんとに安く出来たイスなんですよ。そこにこんなに大きなお尻のおばさんが、座って、これは入らないなと思ったら、意外と入るんですよ。何で入るかよく分からないんだが、そういう費用をかけないで、そこはまだ未だにそうなっていると思うが、あれを見るとやっぱりまだ日本人はまだまだ工夫が足りないなと、ゆっくり背中に立ててやるだけで、それなりの席を確保できるというのに。お金をかけるのではなくて、アイデア次第で安くてきちんとした施設をつくっていくという工夫が必要だなと、いつもそのローズボールのことを思い出しています。大きなお尻のおばさんとともに。

【傍士氏】

どうもありがとうございました。貴重な意見の連続で、コーディネーターとしてまとめようがございません。あっという間の一時間でした。どうも皆さんありがとうございました。

一つだけ、私が言っておきたいのは、これは北九州市民みんなが使うものでなければならないということです。市民の皆さんが一年に一回は行かないといけないのかなと思います。ですから、建設費１００億円に対して人口１００万人だからひとり１万円の話ですが、実質的に考えると３０年使うと考えたら３０で割れば３３０円。一年に１回、足を運ぶ動機があれば３３０円が安いのか高いのか、子どもからお年寄りまで様々な動機を持った魅力あるスタジアム。松本清張の土地でありますから、この清張、いろんな動機を考えて小説書いてましたけど、そういう動機を考える遺伝子を持っておられると思います。本日が誰のための議論かというと、北九州の未来の子どもたちのためにどういうものを残していくかという議論だと思います。そういう意味で今日のスタジアムの議論が、「あの日、北九州市を変えた」、と言われることになればいいなと思います。先ほどのＤＶＤをお見せしましたけど、扉を出た瞬間に、この楽しい夢が覚めてしまわないように、ゆっくりと静かにお帰りになって下さい。本日はどうもありがとうございました。